蘇芳集

松籟　髙橋さえ子

初松籟師の無き空へ空へかな

星ひとつ月一つ松飾りけり

八幡の日向のいろの初雀

この町の雪来る前の松のいろ

外苑の更けて冬夜のにはたづみ

朝日燦旬のみかんをかたはらに

白障子夜々の日数を重ねけり

初午　青山丈

薄氷へ爪先だけを置いてみる

薄氷へ濡れたる棒の投げてあり

通るたび見てはある日の冬桜

初午へもう人参の届いてをり

初午の顔を洗つて乾きけり

紅梅へ日の差して人来てをりぬ

白梅へ来るといつもの日が落ちる

松過ぎる

八木下　末黒

古里や餅のしつかり噛み応へ
臘梅の若木や庭の魁に
こぼれ落つ花器の南天松過ぎる
大寒や牛丼のあと眠くなる
雪吊の芯の孟宗つきぬける
金町の茶房田園日脚伸ぶ
侘助や物言ひたげな眠さうな

十日戎

吉田　幸敏

太鼓打つ声うらがへる初戎
ずいと見て十日戎の握り福
福笹を享け晴天の段葛
鎌倉の松こそよけれ実朝忌
比企谷へ入ればすぐさま冬椿
樹冠より日の降りて来る寒四郎
さるすべり冬日の椅子を寄すところ

おほさむこさむ

小川　美知子

おほさむこさむ父がゐて母がゐて
初夢のふいに自分となつて覚め
また同じセーターを着て風が吹く
決意ひとつくづさずにをる冬牡丹
大岩の間際まで敷松葉かな
北区駒込葉牡丹を通りけり
浮寝鳥見てそれからも歩きけり

去年今年

上林　孝子

嚔して新しき世に座し居たり
初夢をしかと覚えず目覚めけり
去年今年失ひし友得たる友
初鏡いよよ亡母に似てきたり
手を当てて眼休ます冬旱
松過ぎて届く賀状の五六通
どの家も家族の数の蒲団干し

あらたまの

木内憲子

あらたまの夢のなかなる静寂かな
一月のこころ素直に川に沿ふ
鳥がチと離るるたびに梅紅く
寒に入ることのひとつに朝の息
手袋に十指収めてより無言
ゆふがたの賢さうなる冬木立
冬牡丹ほどの誇りを欲しきかな

大波小波

小島みつ如

しばらくは大波小波立て柚子湯
あらたまの日の溢れゐる相模湾
樹から木へなんぞ忙しき寒の鳥
枯木星天神さまへ坂下る
山里の人出そこそこ初天神
「新型肺炎」怖し祈願もマスクして
いちご飴まつ赫初天神の灯に

雪吊

清水裕子

心打つ音とはならず冬の滝
回廊の高きを潜る初閻魔
雪吊の縄の緊張まだ解けず
飴細工の鳩のとび出す初み空
輪飾に風きて影細やかなる
裸木の閑けさを行く夕ごころ
中空へ足音高鳴る春隣

風の日本海

下平直子

年越の夜通し風の日本海
白じろと波立ち上がる初景色
音たてて白波しぶく淑気かな
湯の宿の少し塩つぱき雑煮汁
雨あとの木々匂ひ立つ初詣
鍬始予後まづまづの夫に添ひ
白鳥に水広くあり青くあり